

次郎長

次郎長と一人の医師 その史実は

次郎長翁を知る会
会報 第29号
平成23年9月21日発行
発行所 〒424-0821
静岡市清水区相生町6-17
(財)静岡観光コンベンション協会
清水事務所内
TEL (054)352-7331
竹内 宏
人字
発題 田口 英爾
編集人 植木重敏
印刷所 株ニシガイ
TEL (054)352-2188

船の中で知り合った土佐出身の一人の若者。植木重敏の名は、東京帝国大学医学部卒業生氏名録に明治十九年卒と記載されている。次郎長によつて清水に足跡を残した植木医師その人の曾孫植木豊氏（大阪在住）との交信が始まった。

二十年近く前に遡る。次郎長生家を訪ねた一人の観光客がもたらした情報から、この物語りは始まつた。

明治、東海道線がまだ開通していない頃のことである。横浜から清水へ帰る船の中で、次郎長は一人の若者と知り合つた。若者の名は植木重敏（明治二十六年六月十二日次郎長葬儀の調経帳（香典帳）と記帳された植木重敏の名）

服部さんはその後、植木重敏の妻が、見付天神の宮司を代々つとめる幡鑑家から出していることをつきとめ、袋井市の同家を訪ね、戸籍簿や次郎長が植木医師に宛てた手紙などのコピーを手に入れた。その成果は「季刊清水」第30号（平成五年）に詳述されている。しかし、平成十四年の暮、服部さんがお亡くなりになり、その後の進展は、中斷したままになつていた。

今年（平成二十三年）四月の末、「清水港船宿記

念館末廣氣付」として、田口宛に一通の封書が届いた。差出人は「大阪市天王寺区—植木豊」とある。白い封筒を開いてみると、「私の曾祖父は植木重敏と申します」と書き出されている。現役のビジネスマンらしいきびきびした筆致で、清水まで出かけて行くのはむずかしいが、医師植木重敏について、できるだけ多くのことを知りたいと書かれていた。

植木重敏・のぶ夫妻肖像画（植木豊氏蔵）



この手紙をきっかけに、編集子と植木豊さんの

交信が始まった。わずか四か月ばかりの間に、植木さんからの来信は、白い封筒が五通もたまつてある。私の方から出したのは、その半分にもならないだろう。

私は、まず自分の手もとにある資料から始めた。手ごたえはすぐにあった。明治二十六年六月十二日に亡くなった次郎長葬儀の諷経帳(香典の記録)の中に植木重敏の名がしつかりと書かれていた。

その隣には芝野栄七の名があった。二人は次郎長葬儀に連れ立つて参列したのではないだろうか。

大正十年に亡くなった次郎長とおちょう夫妻の養女山本けんの葬儀の記録には、棺(ひつぎ)の傍に立つ人として、青木久吉、増田勇藏、篠原幹三郎、入谷清太郎、加藤市五郎に並んで、植木重敏の名が書かれている。次郎長の親族、知人の中でも最も重要な人たちばかりだ。

私の方の調べはこれくらいなのに反し、植木さんからは次々と重要な新事実が送られてきた。

まず第一に、明治三十一年の「横浜姓名録」に「横浜徽毒病院院長植木重敏」の記載があつたこと。清水での開業医という以上に明治の先端医療の中枢部を担つた人といえるのではないか。さらにも、明治二十二年内務省衛生局編の「日本医籍」に有度郡清水町で「植木久壽」の名で開業しているとの記載がある。こういった精緻な調べを、植木さんは大阪の地元で、国会図書館の関西館などへ出向いてやつたらしい。どんな会社におつとめになつてているか。私は大変興味があった。

八月初めの土曜日、植木さんが清水へ新幹線で

愚庵歌碑の記録

森町在住の会員大塚恒二さんからお手紙が届き、船宿末廣の前庭にある愚庵歌碑についてのお問い合わせであつた。調べて見ると、静岡新聞に平成十七年十一月二十三日「妹を思う愚庵の歌碑除幕」と記事がでている。ところが編集子の手落か、本会報には記録がない。そこで改めてここに御紹介する。

伏谷如水子孫高石鶴子(写真右端)書の愚庵歌は、

「我が妹を思ふものから／妹が我をこひんこころも／かくやとぞしる」

である。除幕式の十一月二十三日には、東京から愚庵子孫の天田晴彦夫妻や、いわき市から愚庵研究家の柳内守一さんも御列席になつた。

歌は明治十一年(愚庵が次郎長のもとに来た年)歌集「戊寅口占」に収められたもので、「清

見えた。船宿の末廣で初めてお会いし、名刺を見て驚いた。番組のプロデューサーということで、大阪でつくつている「歴史番組」のディレクターなどもやつたそうだ。

末廣で話した後、次郎長生家と梅蔭寺を廻つた。生家には松永宝蔵さん画の「次郎長一代記」が置いてある。植木さんは手にとつて、ぱらぱらめくつているうちに声を発した。「ここにありますよ」見るとその頁は植木医師が患者を診察している絵の頁で、説明文に「袋町四一五番地で開業した」とある。植木さんが大阪からわざわざ新幹線

に乗ってきたのは、植木医院が清水のどこにあつたかをつきとめるためだつたのだ。

その日は土曜日だつたためできなかつたが、後に法務局の土地台帳で調べてみると、形跡は全くなく、「袋町四一五番地は空振りに終つた。

一泊された植木さんと私は、元の市役所付近を散策した。これまでの植木さんの調べでは、植木医院の開業場所は「清水港海岸通り」という東京帝國大学医学部卒業生氏名録の記載が最も信頼が置けるようだ。それは、かつての入江受新田、市役所庁舎付近というのが私の持論である。(T)



船宿末廣の前庭にある愚庵歌碑 平成17年11月写

追悼 後藤磯吉さん

(清水市名誉市民)

・次郎長翁を知る会最高顧問としての二十年



本会(次郎長翁を知る会)最高顧問後藤磯吉氏は八月二十二日、入院先の病院で亡くなられた。九十二歳である。ここに謹んで哀悼の意を表したい。

後藤さんは本会創立時から最高顧問として、二十年近くにわたって、年次総会はじめ主なイベントには必ず出席されるなど、終始熱意をもつてつとめられた。

平成四年五月六日、本会の設立総会が清水市役所八階の大会議室で開かれた。最高顧問に選任された後藤さんは、七代鈴木与平さんと一緒にてあいさつに立つた。後藤さんは神戸市出身だが、清水の人がいかに次郎長を敬愛しているか、自らの体験をもとに話された。人情の機微にふれたその時のお話を、筆者は今でも忘ることはできない。

終戦直後に清水来港

後藤さんは大正八年(一九一九)三月三十日、神戸市の佃家で生れた。本姓は佃康平。昭和十六年山口高商卒業、陸軍将校として下田で終戦を迎えた、隊の解散のため部下を率いて清水港に入港。

当時清水市警防団長

だつた後藤磯吉氏(先代)と出会い。

十一年一月十九日、先代後藤磯吉氏が出先

の静岡で倒れた。脳内出血である。急報によつて応診に赴いたのは、かかりつけの野沢広行医博である。当時後藤缶詰に一台あつたフォードが静清国道を突っ走るが、その車に佃康平青年が同乗していたと、野澤医博の回想記にある。先代磯吉氏は昏睡状態を続けたまま、翌日息を引きとつた。

五十歳であった。ちなみに野沢医博は東海遊侠伝の現代語訳「次郎長」の著者である。

後藤家の一人娘悦子さんと結婚し、先代の名を襲名するのは、本人の述懐によれば、「運命的な出会い」とされる。昭和二十二年から昭和六十一年まで後藤物産(現はごろもフレーズ)代表取締役社長を歴任し、昭和六十一年からは代表取締役会長をつとめられた。

その人柄を知る人によれば、人の世話や面倒見が非常によく、次郎長翁を知る会も、その恩恵を蒙っている。筆者の所管する「次郎長資料室」には次郎長に関連する文書や写真類が数多くあるが、その一つに、後藤磯吉さんから頂いた一枚の大きな写真がある。(次頁写真参照)

その写真は、大正十二年五月、鉄舟寺で行なわれた芝野栄七翁(初代)の銅像除幕式の写真である。高い台座の上に立つている銅像の前には、芝野家の親族が三十人ほど並んでいる。

タテ二〇センチ、ヨコ三〇センチくらいもある大型の写真を、私は磯吉さんから直接渡された。

記憶では、もう十年余も前になるだろうか。私が天野回漕店二百年史をつくるために、同社の社史編纂室に通つていた頃だから、平成十一年か十二年頃だったと思う。後藤さんは車でわざわざ港町の天野本社まで訪ねられて、この写真を渡された。写真はもう一枚、芝野栄七肖像画の写真もあつた。初代芝野栄七翁は改めていうまでもなく、次郎長の盟友であり、鉄舟寺創建の功労者である。次郎長資料室にとつて、この写真は貴重な資料の一つだ。

この写真に写っている芝野家親族の中には、先代後藤磯吉氏と妻きよさんがいる。きよさんは悦子さんの母親である。後藤家と芝野家は非常に深い血縁関係で結ばれている。私は写真の人物たちの名を、港橋ぎわにある芝野家の戸主芝野法子さんに教えて頂いた。写真には、法子さんの父芝野信一郎さんが清水小学校生徒として写っている。

日本平山頂の土地と長島の杜の碑

塗料ラッカーパークの開発者長島銀蔵の生誕百年を記念して「長島銀蔵翁を知る会」が清水の経済人たちによつて結成されたのは、平成十三年のことである。会の推進役になつたのは、後藤磯吉さんで、長島範明君と私がはごろもフレーズの本社を訪ねて相談を持ちかけると、「会長には竹内宏さんになつていただきなさい」と言われた。また「私は清水市民ですから」の一言で、遺産の日本平山頂の土地二万四千平方メートルは、清水市に寄付された。さらに、その土地の一角に記念の石碑を建てることになり、建造の基金づくりには先頭に

立つて募金に当り、七十万円の基金を市に提供した。「長島の杜」と宮城島弘正市長が揮毫した記念

碑の除幕式は、平成十四年暮の十二月二十四日、日本平山頂の一角で行われ、寒風の吹く中を後藤さんは出席された。

本会の年次総会は、毎年六月に開かれ、後藤さ

んは欠かさず出席されるが、今年は体調を崩し、入院されたとのことで珍しく欠席された。

たしか、三月か四月頃のことだったと思う。浜田の静鉄ストアで買物をされる姿をお見かけした。お元気そうに買物を楽しめたご様子だった。それが私にとって、最後となつた。



大正12年5月、鉄舟寺で行なわれた芝野栄七銅像除幕式の写真。参列者の芝野家親族のうち、後列左から6人目（黒白縞の柱の右側）が初代後藤磯吉氏。その右隣は二代目栄七の福氏。最前列左から三人目、立っている児童は芝野信一郎さん。

右側の女性たちのうち、後列右から3人目、髪に結った女性が先代後藤磯吉氏の妻きよさん。——写真は後藤磯吉さん提供による

◆秋の史跡探訪ツアーエー（一泊）は草津温泉へ

旅から旅の渡世人時代、次郎長が最も数多くわ

らじを脱いだのは、武州高萩の萬次郎の所でした。

安政六年（一八五九）久六を討ち果した次郎長は、大政、石松らを連れ、萬次郎から餞別をもらつて草津温泉に一泊し、北陸に向かいました。今回のツアーは、その足跡を辿り、萬次郎の墓がある高萩（埼玉県日高市）を経由して草津に一泊、翌日は信州追分の宿場を訪ねます。秋の紅葉もたっぷり楽しめます。ふるつてご参加下さい。

日 時 平成二十三年十一月三日、四日

宿泊先 草津温泉 ホテル櫻井

参加費 三万一千円

お申込みやお問い合わせは、観光コンベンショ

ン協会清水事務所内の事務局へ

TEL〇五四一三五二一七三三一

編集室から

●本会の設立は平成四年（一九九二）、来年は創立二十年を迎えます。今日まで本会設立に関わつた元老の方がたは、以下のように逝去され、今また後藤磯吉氏を失いました。追悼の意を込め、墓碑銘に代えてここに記します。

七代鈴木与平氏 平成五年五月二十三日。八十三歳

戸田 寛氏 平成十四年四月十四日。八十四歳
服部令一氏 平成十四年十二月十五日。八十八歳
府川松太郎氏 平成十六年十月二日。九十一歳

●今年の秋の旅行は草津温泉一泊ですが、来年は創立二十年、次郎長百二十回忌という節目の年ですから、念願の四国金毘羅詣りで、二泊の旅行を予定しています。ご期待下さい。